

「アイデンティティの障害学，当事者による障害学」

障害学会第11回大会 大会シンポジウム 2014.11.9 @沖縄国際大学

倉本智明（文筆家／関西大学ほか非常勤講師）

riobot@mbf.nifty.com

0. なにを話すか

前半は、障害とアイデンティティについて考察するなかで、戦後沖縄から本土に就職しUターンした人たちとの共通点と違いについて述べる。後半では障害学における当事者学の意味と困難について話す。

1. 障害学(disability studies)とは

A ディスアビリティ、もしくは、ディスアビリティとインペアメントの双方を、社会的に形成／構築されたものとみなす立場からの研究

ディスアビリティ: 社会的不利益

インペアメント : 「正常」から分節され否定的に意味づけられた身体の特異性

障害を個人／身体へと還元する従来障害研究への批判

B これまで障害を無視したり軽視してきた領域における当該対象への注目・研究の促進

→ 障害学 \equiv A \cup B (Bのうち、Aと交わらない研究の扱いは曖昧)

さらに上記におさまらない研究も。

2. アイデンティティの障害学

- 健常者社会が受容／称揚する像への同一化＝適応努力による肯定的アイデンティティの調達は失敗するか限定的。にもかかわらず努力を繰り返すことで、むしろ否定的な自己像は強化される。

- 社会モデルによるアイデンティティ書き換えの試み。

「できない人」から「できなくされた人」へ。

↓

- 社会的障壁の除去によるディスアビリティの解消は「一人前の人間」として期待される役割の遂行をある範囲で可能にするという意味で、肯定的なアイデンティティの獲得と結びつく。ただし、「ある範囲で」と断りを入れたとおり、社会的障壁の除去だけでは遂行できない役割が存在する。加えて、社会経済的な制約や技術的な限界から、なくすことのできる障壁は常に限定的である。したがって期待される役割に応えるという方向でのアイデンティティ管理に望めるのも限定的な効果ということになる。どこか、そのような限定性は「一人前の人間」からの距離を絶えず計測し意識するよう仕向け、強迫的なアイデンティティゲームへと障害者を駆り立てる装置ともなりうるので要注意。
(否定的な面を強調しすぎかも……)

- できる／できないという次元とは別に、身体の造作や動き、それらと関連づいたふるまいや行動様式に割りふられた意味をめぐる葛藤や闘争についても考える必要がある。白濁した眼はにごりのないそれとはおなじようには扱われない。仮に機能に変わりがなかったとしても、前者は「異常」とされ、否定的なイメージを見る者に与える。片足を引きずるようにして歩くのは「正常な歩き方」ではないし、茶碗によそったごはんをスプーンで食べるのは（幼児でない日本人なら）「ふつうの食べ方」ではない。ともに理由を問うその手前で、既に負の意味が与えられている。そのような美醜の秩序や行為をめぐる規範を内包した文化を私たちの大多数は生きている。ここでいう「大多数」とは健常者だけを指すのではない。白濁した眼の持ち主や片足を引きずって歩く当の本人もまた、多くの場合は同じ文化を身体化している。ここにアイデンティティをめぐる葛藤が生じ、闘争が起ち上がる。

- 障害者は「帰るべき故郷」を持つか？

3. 障害学における当事者学

- 多くの事象は異なる立場にある「当事者」の間に立ち現れるが、ここでは当事者の語を障害当事者の意に限定して用いる。
- 障害学＝当事者学ではない。障害学の一部（ただし不可欠で重要な部分）として当事者による学がある。
- 否定的なアイデンティティから自らを解き放ついとなみという側面を当事者学はもつ。
- 当事者として学問に携わることには困難も。
↓
- メインストリームの学知を身につけるプロセスに、否定的なアイデンティティを形成・強化する契機が内在する。その程度はディシプリンによって異なる。医学や教育学、社会

福祉学といった障害を直接取り扱う領域においてその傾向はより顕著だが、経済学、社会学、その他の領域でもこれがないわけではない。

(存在が否定的に言及されるほか、存在そのものが前提されていない場合を含む)

- 当該主題を扱うにあたって、非当事者には求められる問題意識に関する説明責任が、当事者であるというだけで免責されたり深く問われなかったりする傾向はないか。あるとすれば、ひとり問題と格闘する体力と禁欲的な態度を身につけることが非当事者より強く求められることになる。これができなければアウトプットは貧しいものになってしまう。

- 非当事者による当事者の権威化

→ 「良心的知識人」(死語?)の罪

(以上)